

平成 29 年度 第 2 回高岡市総合教育会議 会議録

I 日時 平成 29 年 11 月 1 日 (水) 午前 9 時～午前 10 時 30 分

II 場所 高岡市役所 3 階 庁議室

III 出席者 高岡市長 高橋 正樹
高岡市教育委員会
教 育 長 米谷 和也
教 育 委 員 河田 悦子
教 育 委 員 森 美和
教 育 委 員 長谷田 祐一
教 育 委 員 土田 一清

事務局関係

総務部

次長・総務課長 戸田 龍太郎

総務課係長 木村 文徳

教育委員会事務局

教育次長・参事 柴田 文夫

教育次長・学校教育課長 鳥内 禎久

総務課長 笹島 永吉

総務課副課長 島田 輝

総務課係長 水上 暁

IV 傍聴者 1 名

V 協議の概要

1 開会

- ・市長あいさつ

〔高橋市長〕

「これからの高岡の教育を考える懇談会」での意見などについてご報告をいただき、これを題材として、この総合教育会議でも議論を深めてまいりたい。

昨今の課題としては、高校再編の動きがある。市としてはこの動きに合わせ、学校教育の在り方について検討していく必要があるのではないかと思う。

また、学校施設の老朽化や児童生徒数が減少している中で、小中学校の在り方を考える必要があるという課題もある。さらに、人口減少の中で子ども子育て、教育の充実の観点から色々な議論もある。

学習指導要領の改訂が実施段階に入ってくるので、小学校段階での英語教育・ICTなど、新しい課題に対する取り組みも進める必要があるかと思う。

市内の学校の耐震化をこれまで進めてきたが、志貴野中学校の改築が終わり、年度内に終了予定の野村小学校体育館の改築をもって、学校施設の耐震化は完了となる。

そういったことも念頭におきながら、懇談会の経過報告をお聞きしたいと思う。

1 協議事項

「これからの高岡の教育を考える懇談会」の報告について
(教育委員会事務局総務課長 説明)

〔高橋市長〕

「夢を持っている子が少ない。」とする意見についてどう思うか。最近、若者全体が、非常に節約的で良く言えば真面目、地味になっていると指摘する意見もあるようだ。

〔森委員〕

自分の頃よりも、今の子ども達は目標を設定することが上手いと思う。より現実的に物事を考える子が多くなったように感じる。これは、学校の先生やスポーツ指導者の方が上手に導いてくれているおかげではないかと思う。少し頑張ればクリアできる課題を1つずつこなしていくことで、その先の夢に辿りつける。最終的に夢を達成できなくても、その過程を認めてあげることを大事にしてあげたい。

〔河田委員〕

日本の子ども達は学力の面では優秀だが、将来どのような夢を抱いているか、また、それを楽しいと思っているかという面については、世界的に比べて低いというデータがある。

課題を1つずつクリアしていくことは非常に大事で、高岡の小中学校の児童・生徒は、部活動を含めて、そのような経験を多くさせてもらっていると思う。実際にスキルアップしていく満足感・充実感を得ると同時に、自分の知らない世界や広い世界で色々な物を見て憧れることが夢につながると思う。そのため、確実にやったことに対する成就感を得られる体験と、色々な経験をして憧れをもてるような体験ができる場を提供していくことが、夢を持つということにつながっていくのではないかと思う。

また、教育成果の可視化については、今何をしているのか、何が問題なのかについて見えてくるような状況をつくる必要があると思う。

これからの時代は、コミュニケーション能力と変化に主体的に対応できる基礎力が必要であると思う。コミュニケーション能力の一番の基礎は、挨拶である。

市内の小中学校では学校評価をしており、子ども、保護者、教員がそれぞれ評価をする。時と場に応じた挨拶ができたかや、家庭の中で子ども達は挨拶をしているかといった評価項目が、各学校で工夫されている。また、評価結果についても、子ども達だけにではなく、PTA便りなどを地域の方々にも配布してフィードバックしている。高岡で長年培ってきた多くの良いものをぜひ評価し、その蓄積のうえに次へのステップアップができれば良いと思う。

〔教育委員会事務局〕

各学校でアクションプランを定めており、重点的に進めていくべきこととして、3つないし4つを位置づけており、この中に挨拶の項目もある。以前はただ単に挨拶をしようということだったが、最近は相手に分かるように、相手の目を見てなど、より具体的に数値目標として設定している。子ども・教職員・保護者からアンケートをとっているが、結果に差が出る。この差が何かということを経験して次に活かしていくことが特徴である。

〔高橋市長〕

評価結果を対外的に地域社会にオープンにしていくという、高岡の評価システムをアピールしていくことが必要かと思う。

〔土田委員〕

ビジネスにおいても、活躍できる人を育てたいと考えている。仕事で活躍できる人と成長が止まる人には境界線があるように思う。できないことの原因を色々並べる人は、どうしてもそれにエネルギーがかかり前に進まない傾向がある。どうしたらでき

るかという視点をもって目標に向かっていくということができれば、良い教育ができ、良い人材が輩出できるのではないかと思います。教員と児童・生徒と一緒に活動していく中で、そのようなことを一緒に考えていく姿勢があればよいと考える。

〔長谷田委員〕

次期学習指導要領では、小学校の低学年から英語教育が取り入れられることになるが、保育園や幼稚園で実施しているところがあるように、もっと早い時期から取り入れても良いのではないかと考える。慣れることが一番大事であり、小さい時期からそういう機会を与えてあげるのが良いのではないかと思います。

小中一貫教育に関しては、少子化の時代を迎える中で、やむを得ないこともあるが、弊害も指摘されているところなので、これらのことについて解決を図ることが前提になるのではないかと思います。

また、学校、地域、PTA、部活動等の連携については、システムづくりが必要になってくるのではないかと思います。高齢化社会への対応では、団塊の世代が75歳を迎える2025年を目途に、中学校区を基準として地域包括ケアシステムの構築が推進されている。小中一貫となると校区が広がるため、地域の方の理解や協力が必要となるが、地域包括ケアシステムの地域・コミュニティで支えるという考え方は教育にも通ずるところがあり、地域を巻き込み連携して支えていける体制が作れば良いと思う。

また、将来的には、小中一貫校と地域包括支援センターが一体化されているなど、地域のあらゆる人が集まる場となれば、子どもの夢を育むことや高岡の活性化にもつながると思う。

〔高橋市長〕

地域での包括的なケアシステムの構築は全国的な流れであり、小・中学校区単位での見守りや支援のネットワークづくりが進んでいる。私としても、子ども達や障がい者も含めた地域での包括的なケア体制の構築が最終目標であり、これを進めていきたい。

〔高橋市長〕

義務教育の9年間で何を子ども達に教えるか、またどういうシステムで教えるのが一番適切かという課題の中に、小中一貫校というテーマがあると思う。

コストの観点もあるが、9年間を一つの連続した流れとして捉え考えても良い時期かと思う。

〔米谷教育長〕

連続した学びは、教育分野で大きな課題となっている。例えば、幼稚園・保育園と小学校とのつながりが、ある時大きな課題となり、これをどう乗り越えていくかとい

うことで、小1ギャップという言葉になった。また、中1ギャップということで、小学校と中学校とのつながりをどうスムーズに、段差を取り払って学んでいくかということが課題となっている。小学校から中学校への過程で成長・発達の段階もあり不登校が多くなり、社会問題にもなっている。こういったところをしっかりとみていこうと考えている。

また、中・高一貫という仕組みも平成10年度以降、国で制度化され、全国的に見ても公立の学校が作られてきている状況がある。

義務教育期間の9年間でいかに有効活用して子ども達の能力を引き出すかということが国でも議論されて、例えば義務教育学校という9年間一貫した仕組みを選択的に導入しても良いと国も判断している。また、従来の小・中学校を併設して、生徒・教師が行き来するようなやり方もある。

文部科学省も学校施設の有効活用ということで方向が大きく変わっていきいているので、高岡ならではの連携・一貫ということを検討していく時期に来ているのではないかと捉えている。

〔高橋市長〕

一貫校については、児童・生徒の減少や財政問題といった切り口から入りがちだが、私としては、2つの観点を持っている。1つは、小中学校9年間の間に反復して教えていくことが良いか、又は、9年間で1つのカリキュラムとみて必要な時に必要なことを教えていくようなトータルカリキュラムが良いのかということを考える。もう1つは、子ども達の体力と移動距離についてである。

〔河田委員〕

反復と積み重ねのどちらが良いかについては、教科によると思う。9年間見据えてのシラバスを積み重ねていけば解決できるのではないかと思う。また、子ども達の体力と移動距離の問題については、今の子ども達の方が体力があり、多少移動距離が長くなっても大丈夫かと思うが、小学校低学年と高学年の生徒には、体力差があるので配慮は必要かと思う。

高岡では中学校区毎に特色がある。例えば、芳野中学校には前田墓所と瑞龍寺があるとか、古くからの商店街を抱えているところもあれば、昔から小中学校が一緒に行事をしているところもある。特に高岡は歴史と伝統の長さに応じた特色があるので、それを生かして9年間を考えても良いのではないかと思う。

また、想像力も大事である。想像力があれば見えないものを見る力ができてくるし、相手への思いやりもでてくる。これをどう育てるか、小さい頃からの自然体験、それから体を動かして家族や地域の人と一緒に行動を伴う体験、さらに、読書による想像力の豊かさ、幼保・小学校低学年は読み聞かせをととても大事にしている。そういうものが想像力を培うことにつながる。

〔長谷田委員〕

少子化が大きな問題の1つになっており、読み書き能力の低下も見られている。大きな視野からみた連携で教育を行っていくことが大事かと思う。

〔土田委員〕

小中一貫教育の推進については、市民が高岡市の教育に魅力を感じる良い切り口になると思うので、これにより、高岡市では子ども達が皆、英語を喋れるようになるといったストーリーや、低学年のうちから専門的なことを身に着けることによって、高岡らしさが出せるようなカリキュラムがあれば良いのではと思う。

〔高橋市長〕

学校の中で地域のテーマを取り上げていくということはどうか。

〔米谷教育長〕

以前から市長が提案されている、外国人が高岡に訪れた際に、英語で説明・紹介ができるようになるという方向性は、ぜひ進めていきたい。高岡の子ども達が小学校・中学校での英語を学ぶことにより、自分の地元のことを説明できる、また、案内できるという力は目標としてしっかりと位置づけたいと思う。

〔森委員〕

小学校低学年の児童や園児の暗記力はすごい。意味が分からなくても、英語で高岡を紹介できる文章を憶えれば、大人になっても残っていると思う。

〔高橋市長〕

郷土への愛着や誇りを持たせるというテーマを設定した時に、ものづくり・デザイン科の果たしてきた役割に加え、それ以外に何を考えたら良いのかということについてどう考えているか。

〔米谷教育長〕

1つは今年度から始めた5月1日の「歴史・文化に親しむ日」である。5月1日は高岡御車山祭の日だが、各地域においてそれぞれ伝統を引き継いでおられるので、地域の事情も踏まえながら大事にしていきたい。

もう1つは、授業の中でも短歌・俳句といった古典に親しむということで授業でも行っている。高校生短歌バトルも高岡で開催されているので、単発のイベントではなく、9年間の学びの中で位置づけ、子ども達が多様な経験ができるようにしてまいりたい。

〔高橋市長〕

小中一貫教育については、制度論、実体論、教育論など様々な観点から積極的にご検討をお願いしたい。

〔米谷教育長〕

本日の議論・ご意見を踏まえ、義務教育9年間の連続した学びの観点について、調査・研究を深めていきたい。また、中学校区ごとに地域の特色があるところのご意見があったことから、まずは、市内全ての小中学校において、連携という観点から教育の充実を図っていきたい。小中一貫についても、全国・県内で取り組み事例があるため、先行事例を研究しながら、市内でも一定の学校で、小中一貫連携教育に関する実践研究を次年度以降進めさせていただきたい。

また、教育委員会としても中学校区を回り、PTAの皆さんから直接ご意見をお伺いしたいと思っている。

以上